

美術フォーラム21

Bijutsu Forum 21 / 2023

特集

東アジア文人画
の「近代」

vol.48

特集 東アジア文人画の「近代」

河野道房編集 14

I 文人・文人画とは何か

1 『列朝詩集小傳』に見られる「文人」の諸相……………大平桂一 16

2 文人画の造形と鑑賞——筆致・点景・空間を中心に……………竹浪 遠 24

3 文人画家としての蘇軾と、後世における彼の文人画思想への誤解……………衣若芬／前田佳那訳 30

II 東アジアでの広がり

4 十四世紀の日本人画僧と文人文化……………森 道彦 36

5 一韓抄の絵画観……………宇佐美文理 43

6 彭城百川の画業における俳諧の意義……………筒井忠仁 48

7 高麗時代から朝鮮初期までの文人画——墨竹を中心に……………朴 株顯 55

III 近代の諸相

8 《亦復一楽帖》をめぐる或る茶会——大正文人たちの幕末への追想……………竹嶋康平 61

9 長尾雨山と内藤湖南の中国書画観——林平造(号蔚堂)の収集品をめぐって……………呉 孟晋 67

10 洋画家の文人画的傾向——須田国太郎の場合……………河野道房 74

| | | |
|------|---|-----------------|
| | 書評 | |
| | 藤原貞朗著『共和国の美術——フランス美術史編纂と保守／学芸員の時代』 | 永井隆則 102 |
| 表紙解説 | 表 郭昇《幽篁枯木図》京都国立博物館 | 河野道房 106 |
| | 裏 川口茜漣《八木重吉のうた》個人蔵 | 土田真紀 108 |
| | 執筆者紹介 | 110 |
| | 英文要約 | キャロル・モーランド訳 113 |
| | 11 光を失っても藝術は可能か——汪士慎／長谷川沼田居と身体的欠失(盲者)の文人画 | 塚本磨充 83 |
| | 12 日本近代文人画略史——多様な表現者と活動をめぐって | 村田隆志 89 |
| | 13 川端康成の文学における心画——「心を写す」「意に適う」から「品を求める」へ | 周 関／根來孝明訳 95 |

特集 東アジア文人画の「近代」

河野道房

夏目漱石は、イギリス留学後から小説を執筆し始めるが、彼の代表的小説『吾輩は猫である』『草枕』等に開示される、絵画や芸術理論を中心とする諸学芸の知識は、欧米のものだけではない。それは日本在来の

ものに加えて、漢学の素養による中国文化、特に文人文化に根ざすところが大きいと思われる。また、はじめ黒田清輝に師事した岸田劉生は、次第に北方ルネサンス絵画の影響を受けて画風を確立していくが、麗子像や静物画には中国絵画の影響を見てとることができらるだろう。さらに劉生と同年生まれで、スペインに留学した画家、須田国太郎は、ヨーロッパの文脈で絵画の理論や技法を学んだが、彼の著作に見る絵画観には、文人画家的価値観を見出すことも可能である。

こうした、一見中国文化とは関わりが薄く見える作家、画家にも、中国由来の文人の思想や文化を垣間見ることが出来る。さらに積極的に中国の精神文化を研究した中国学(支那学)の学者たちや文学者、そうした研究者の指導や監修を受けて形成された近代の財閥系美術コレクション、そしてそれらを楽しむた文化人たちの、近代的価値観に与えた文人文化の根深さや、その大きさは想像に難くない。何より明治の西洋文化移入を支えたのは、漢学の深い理解にもとづく漢語によるヨーロッパ言語の翻訳であり、哲

学・美学・美術といった近代の翻訳用語は、現在でもそれらを用いなければ、高度に抽象的な精神文化を語ることはできないだろう。

しかしながら近代以降の日本では、伝統的な思想や価値観は、ともすれば軽視され、忘れられがちで、特に第二次大戦後は忌避される傾向が強まったように思われる。近年の美術史研究においても、文人画の作品研究は少しずつ進展する一方、その思想や価値観への関心は停滞気味といつてよいだろう。

そこで今、東アジア文人画の「近代」と題して、文人画と近代との関係を改めて考えてみたい。ここでいう「近代」とは、歴史学の古代・中世・近世・近代・現代の区分のうち、近世・近代を包括する概念として括弧つきで表示した。それは、Ancient, Medieval, Modernすなわち古代・中世・近代という、大きな区分で意味するところの「近代」に対応する。つまり文人や文人画の近代性に着目して、その意義を再考するものとする。

東アジアにおいては、宋代(九六〇〜一二七九年)に文人画が成立し、絵画と文人・知識人との関係は複雑かつ密接に展開することになった。特に元末(一三六八年)以降、それまでの花卉雑画に加えて、文人山水画の様式が確立した後、明末(一六四四年)に董

其昌が南北二宗論によって文人画の正系を定めると、それらに対する知識と理解が、ある種の教養として、文人に必要な知的体系として定着していく。

そうした傾向は、多少の紆余曲折を経るものの清朝(一六四四〜一九一一年)を通じて存続し、近代のヨーロッパ文明の移入後も、東アジアの知識層の間には、伝統的かつ高尚な文化として存続した。さらに近代のみならず、現代に至るまで、その枠組みや美意識は存在し、東アジア全体に拡散する様相を見せる。朝鮮半島においては朝鮮王朝の両班文化、日本においては禅宗やその影響下に発展した茶華道等の芸道、数奇文化、武家の精神文化に広がりを見せ、明治時代(一八六八〜一九一一年)以降、戦前期まで(一九四五)は、財閥の収集を中心とする思想や美意識にまで及んでいる。こうした近代精神史の一角を、文人・文人画の価値観という観点から問い直し、混迷を極める現代の価値観への、ひとつの視座を共有することを、本特集では目的とする。

では改めて、文人画とは何か。当初は最先端の前衛的芸術でもあったが、現代においては文字通り骨董品になってしまった伝統的文人画とは、文人たちの精神文化を視覚的に具現したもの、と言えるかもしれない。ここでは以前、別稿で示した定義に従い、「文

人が描いた絵画、または文人画様式で描かれた絵画」としておきたい(尾崎・竺沙・戸川等編『中国文化史大事典』大修館、二〇一三年)。「胸中」に得る所(『宣和画譜』巻20、墨竹叙論)の竹や、丘壑(董其昌『画禅室随笔』巻二「画訣」画家六法)の絵画表現、それが本来の文人画であつたらう。

さらに、文人とは何か。「近世中国の文人とは士人の私的側面であり、(中略)士人とは、道徳的能力具備を原理とし、古典教養と作詩文能力によって選抜され、官としての統治能力が期待される、儒教的知識人すなわち政治的・文化的支配層をさす。そして文人とは、士人が公的活動から離れた私的生活において自らの嗜好に従つて発現させる姿である」(荒井健編『中華文人の生活』(平凡社、一九九四年)「まえがき」3頁より)という定義に、とりあえず依拠しておきたい。本特集の内容を俯瞰しておこう。まず第一部では、宋代より顕在化した文人・文人画の意味や諸相を、具体的事例から考察する。1番目の大平論文では、『列朝詩集小傳』に見られる文人の事績を具体例に抽出し、文人とは何かを提示する。その常識では考えられないようなエキセントリックな人生は、士夫・文人を単なる知識階級と見なす認識を粉碎してくれるだろう。2番目、竹浪論文では、文人画というものの造形的特質を的確にまとめ、その見方・鑑賞法を解説する。難解な文人画の見方を手ほどきしてくれる、よき案内となる。3番目、衣論文は、文人画の概念を決定づけた蘇軾に対する後世の誤解を説く。II部5番目、宇佐美論文と合わせて、文人画史において蘇軾がいかに重要な役割を果たしたか、よく分かるだろう。

第二部では、東アジアにおける文人意識・文人画の広がりや、個別の事例から考察する。4番目、森論文は、初期水墨画として一括されてきた、鎌倉時代から室町初期の禅宗系絵画の見直しを図る、意欲的な論考である。禅宗と文人のかかわりを考えるうえでも、大いに示唆を与えてくれる。5番目、宇佐美論文は、日本での蘇軾理解とその展開を提示して興味深い。当時の禅林における蘇軾詩の非常に正確な理解と、その変容・展開の様相は、文学研究の領域をはるかに越えた、文化的広がりを持つものである。6番目、筒井論文は、江戸時代の初期文人画を代表する彭城百川の、あまり知られていない俳諧とのかかわりに注目する。文人画家が文学に傾注するのは当然のことであろうが、日本の文人画の場合、専ら文事に従事するものが文人画家になるとは限らないので、そうした事例の研究は今後もさらに必要となってくる。7番目、朴論文は、高麗から朝鮮王朝時代にかけての墨竹の系譜から、朝鮮半島における文人画の成立を考察する。中国や日本に較べて、まだ不明な点が多い韓国絵画史でも、文人画の成立と展開は大きな主題といえるだろう。

第三部では、近代日本における文人画の諸相を検討する。8番目、竹嶋論文では、大正期の財閥系茶会に見る、幕末煎茶をとおした文人への憧憬を論ずる。明治・大正時代を牽引した財界の大物たちを支えたのは、江戸時代以前の文人的美意識・価値観であったことが分かる。9番目、呉論文は、近代漢学者たちの中国書画観を検討することで、近世以前の文人や文人画に対する当時の研究状況や理解度を考察する。

現存する中国書画の多くに長尾、内藤の痕跡があり、現代にも続く学者的、文人的価値観を見ることができ。10番目の拙論は、近代の洋画家においても、文人的意識・価値観を有する画家が存在することを、須田国太郎を例に検証する。須田のストイックな作画態度以外に、中川一政のように天然自然に文人画的思考、発想を持つ画家もおり、さらに検証が必要であろう。11番目、塚本論文は、本来の文人画のあり方、精神が、視力や利き腕などの身体的欠失にも対応している、むしろその方が純度の高い文人画の本質を体現できるのではないかと、たいへん斬新な視点から見た問題を提出する。文人画とはなにかを改めて問いかける、重い問いである。12番目、村田論文は、従来等閑視されていた近代文人画研究の意義を再確認し、その複雑で示唆に富む展開を簡潔にまとめようとした力作である。近代文人画史の構築は、さらに研究が俟たれるテーマといえよう。13番目の周論文は、川端康成の文学における絵画や文人画の精神を論じた、興味深い内容である。川端文学を理解するには、もはや文学だけではなく、絵画鑑賞の本質を理解する必要があるのである。

以上、テーマは膨大、かつ各論それぞれの立場からの堅実な考察ゆえ、いささか掬うべき網は疎に過ぐのそしりを免れないが、編者の意図を讀者諸氏にご賢察いただければ幸いである。文人画とは、きわめて「近代」的事象なのである。

*なお本特集は、きょうと視覚文化振興財団による『美術フォーラム

21』第48号視覚文化研究会(研究員・宇佐美文理、竹浪遠、呉孟晋、筒井忠仁、河野道房)の成果を河野がとりまとめ、編集にあたった。



9784925185783



1921370023002

ISBN978-4-925185-78-3
C1370 ¥2300E
定価 2,530 円(税込)

ある日のニニニ
山と
なり
ある日のニニニ
山と
なり

ある日のニニニ
山と
なり
ある日のニニニ
山と
なり

